

中央の編集委員の方々のご努力のおかげで、各地編集委員と言ってもただ名前を連ねるだけで済んできたので、今回編集後記のご依頼を頂いて戸惑いました。何を書いてもいいよ、と白紙のページを渡されるのはおそらく子供の時以来、夏休みの宿題をもらったような気分になりました。

考えてみると、物性研究も査読なしで、原則として「来るものは拒まず」ですから、最初は白紙の雑誌と言ってもいいのかもしれませんが。冊子体の物性研究が廃刊された際の歴代編集長の記事を読むと、各時代の編集委員の構想のもとで独特な色合いが形作られて来たことがよくわかりますが、修士論文から長文の論考、名著の翻訳から（受け手によっては大いに差し障りがある）個人の意見までが時には掲載されるスタイルは、現在まで敢えて白紙の面白さを残さんとしているように思います。私も、ごく希に編集方針に私見を述べたくくなって、ご賛同を頂けたり、あるいは頂けなかったりしますが、そうした個々の議論で良くも悪くも雑誌の将来の方向性や深みが決まって行くのだなと実感します。

ところで、ここ何年かで何かいっぱいいっぱいのときに、ふと生まれる空白の時間に偶然触れるものが時に新鮮な視点を与えてくれる経験をしばしばするようになりました。それは、人だったり詩だったり猫だったりとあまり物理に関係ないことが多いのですが、考えてみると、物理で最上とされる「普遍的な理論」の価値も、一研究者の個人史としては、その不変性そのものより、既存の理論から抜け落ちた気になる事実を拾い集め、頭が一杯のときに、それらを一掃する視点をもたらす一瞬の感動にあったのだと思います。仕事に追われて、せいぜい気になる個別の事象をつつぐくらいしかできない凡人研究者の私としても、時々、空のうつわを作って飛び込んでくる有象無象との化学反応を楽しむぐらいのことは忘れないように心がけたいものです。最近知人が言った「人生も益々、非線形の度合いが増ってきていい感じですね」という言葉に妙に共感するこの頃です。

駄文はここまで。何を書こうかと困って過去の記事を見ると、皆さん千差万別、思い思いのテーマを語っておられて、一番物性研究らしいのは実は編集後記のようです。